

平成25年度 自己点検・自己評価(結果)

学校番号	24	学校法人静岡理工科大学 静岡北高等学校	記載者	森竹健治
------	----	---------------------	-----	------

学校教育目標	1. 常に誠実で、清らかな心をもって物事に真剣に取り組むことができる人材を育成する。2. 現状に甘んじることなく、日々新しいものを創り出そうとする気持ちを持ち、何事にも積極的に挑戦していく人材を育成する。3. 技術の進歩が著しい今日、大学院・大学・専門学校という高等教育機関の場において、高度な科学技術を習得できるように、基本的な学習を身に付ける。	【総合評価】 定員の確保・国公立大学合格者増加による進学実績の向上など、表向きには評価できる年であったといえる。基本的な学習を身に付ける姿勢や、物事に取り組む姿勢、目標を達成しようとする姿勢に対して、粘り強さややり遂げる強さを求め、その中で人間性の向上を大切にして導き出せるよう、教科指導・担任指導に取り組んできた。社会に出て、新しいことに素直に挑戦できる人材を育てるため努めた。基本的な学習は身に付きつつあるものの、体験に欠ける部分もあり、創造性を育むための心の教育を深めることが今後の課題となる。		
教育方針	将来、科学技術に夢と希望を持ち、創造性豊かな人材育成の基礎をつくる。			
今年度の重点目標		評価	成果と課題	次年度の取組
1 募集定員を必達する		4	① 体験入学、学校説明会、保護者対象説明会、静岡理工科大学見学会、塾対象説明会を開催。中学校主催の説明会、塾主催の説明会に数多く参加した。 ② 学校説明用パワーポイントを共有し、中学校や塾主催の説明会では統一された内容でプレゼンテーションを実施した。 ③ 学期定員440人に対し、485人を入学させることができた。	① 現状の広報活動を検証し、効率よく、多くの対象者に本校の情報を提供できるようにする。 ② 入試広報課あるいは一部の教員だけでなく、全教員が広報活動を行えるようにする。 ③ 定員充足困難校が増加している中、定員充足と成績上位者獲得を継続していく。
2 進学実績の向上		4	① 国公立大学合格が73人で、50人突破連続を7年とし、中でも最高記録を達成した。併せて、離開私立大学に16名を合格させることができた。 ② 各教科担任が経験に基づく指導は行われているが、組織的な指導が不足している。 ③ 模擬試験結果の回覧や外部講師による分析会が行われているが、自校内での分析会が不足している。	① 進学実績の維持を図りつつ、進学先のランクアップ(旧帝大、医・薬・歯学部)を図りたい。 ② 教科部会や教科主任者会議において、研究授業及び教員研修の在り方について検証する。 ③ 模擬試験を視野に入れたら、教科内で授業進度や試験問題内容について検討する。
3 法人傘下の高校としての使命を果たす		4	① 法人内学校と連携し、大学、専門学校への志願者目標値達成を図るが、大学へは60名以上目標に対し51名、専門学校へは50名以上目標に対し92名とした。 ② 社会的ニーズに応えられる人材育成を念頭に置いた学習支援のプログラムを開発はできなかった。 ③ スペシャリストとしての価値観が高められる支援活動を展開できなかった。	① 大学、専門学校共に、志願者数という目標値ではなく、入学者数を目標値として設定する。 ② 大学、専門学校との情報交換会を密に行い、担当者レベル止まりでなく、該当学級及び生徒に関わる教員間の共通理解を図る。 ③ 教員に対して、法人内の大学・専門学校からの情報が得られる機会を設ける。
4 国際化教育を充実させる		4	① 本校独自のプログラムとなったSKYSEFにおいて、海外高校16校を集めた国際フォーラムが開催できた。 ② 国際フォーラムとは別に、市内のSSH校2校と連携し、科学英語発表会を開催できた。 ③ 短期・中期の語学研修が実現できるよう、姉妹校との提携を拡大できなかった。	① SKYSEFという国際フォーラムに、特定(理数科、国際コミュニケーション科)の生徒だけでなく、他学科・コース生の参加機会を拡大する。 ② 英語科を中心に、教員と生徒が英語に親しめるような環境を構築する。 ③ 現状ある海外の姉妹校及び提携校の状況が、リアルタイムで入手できるような方を検討する。
5 中高6力年一貫教育を充実させる		3	① 育てていきたい生徒像と教育目標を定め、授業及び課外活動で教育目標を実現するための特色を持たせた。 ② 学習成果の確認は、年度当初に一部では行われたが、通年での確認ができなかった。 ③ 人間力をつける指導は、成長期にある生徒に対しては行われた。	① 高校教員は会議のみで学習効果の検証をするのではなく、学習の現場(特に体験学習)に参加できるような機会を作る。 ② 中高連携教育委員会及び教科主任者会で、学習成果検証と発表会の開催を行う。 ③ 入学してきた内進生が、各学科・コースにおいて、リーダーシップを発揮できるような人間力育成を、中学校教員とともに検討する。
6 特色ある理数教育を推進する		4	① 理数科第2学年で必修化された理数課題研究が、数学科・理科教員を中心に展開された。 ② SSHのために、実験室3室と準備室1室が同一フロアに整備され、課題研究活動を促進させ、研究活動の活性化を図ることができた。 ③ 理数科スーパーアドバンスコースでは、科学者、研究者に直接関係する機会を設けることができた。	① 課題発見と課題解決の能力を高められるようにし、課題研究による成果を向上をさらに高める。 ② 実験室及び各理科教室の整備を図り、効率良い課題研究活動が展開できるようにする。 ③ 課題研究の範囲では、県内にある理数科において、先導的立場となれるようにする。
7 特色あるキャリア教育を推進する		4	普通科第1学年はサタデースクールにおける進路講演講座、普通科第2学年はキャリアパートナーシップを中心に、キャリア教育を実践できた。理数科及び国際コミュニケーション科の、3年間のキャリア教育(進路)計画を作成した。 各自の進路に興味・関心のある分野を調査、研究、発表する学習活動を実施できなかった。	進路講演講座では生徒に企画から運営までを任せると、進路講演そのものがキャリア教育となりうよう検討する。 キャリアパートナーシップは、生徒の提出した報告書をまとめた冊子を作成しているが、生徒自身が発表する機会を検討していく。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績	成果と課題	次年度の取組	
学校経営	設定された教育目標にそい学校経営計画書が作成され、それに基づいた教育活動を展開する。	教育目標、学校経営計画書、教育活動	教員個々の検証・評価は確実に進んでいるが分掌、学年での総合的な進捗確認・検証が少ないので、その点を強化する。	例年どおり、年度当初には学校経営計画書が作成され、それに基づき教員個々の職務・業務目標が設定され、年度途中には進捗確認、年度末には検証・評価が行われた。	4	年度当初には学校経営計画書が作成され、それに基づき教員個々の職務・業務目標が設定。年度途中には進捗確認、年度末には検証・評価が行われ、事業報告書にまとめられた。	個々の教員が多忙にすぎ一つ一つが雑になっている。一方で業務の比重に大きな偏りがあるように思う。評価に対する適正なフィードバックを検討し、教職員のモチベーションアップに繋げる。
教育課程・学習指導	適切な教育課程が編成され、学習目標・計画が明示され、日常の学習活動を効果的に展開する。	教育課程、学習目標・計画・指導、課題実施、学習状況把握	各教科において、新学習指導要領の導入準備は完了した。導入・実施される第1・2学年で、適切な教育課程が編成され、学習目標・計画の明示により、日常の学習活動を効果的に展開されているかを検証する。	新学習指導要領に基づいた、教科指導の推進を図れた(特に先行実施となった数学・理科)。 家庭学習(探究型学習)の定着を図るためには、家庭学習の記録を一部の学科・コースでは実施された。 コース制の変更(体育コース・普通コースの廃止、進学コースの改名)に伴う、生徒の進路(コース)選択に対して適切な助言指導は行えた。	4	新学習指導要領に基づいた、各教科の指導推進を図れた。家庭学習(探究型学習)の定着を図るためには、家庭学習の記録を一部の学科・コースでは実施された。2年目となるコース制の変更(体育コース・普通コースの廃止、進学コースの改名)に伴う、生徒の進路(コース)選択に対して適切な助言指導は行えた。	新課程における大学入試問題の研究と、指導の実践。生徒の勉強習慣をつけていくことを考えて、家庭学習の指示を明確にする。
生徒指導	健全な高校生活を送れるような生徒への啓発活動を行い、個々の生徒へのサポート体制を家庭との協力のもと確立し、生徒理解に努める。また自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立、自立した生徒の諸活動	創立50周年記念事業とその事前準備等を通して、本校の歴史・伝統とともに目指す学校像・生徒像について生徒への啓発活動を行い、自立した生徒の育成のための支援をする。	生徒への啓発活動、家庭との連携、事前・事後指導体制、人間教育、生徒理解、基本的な生活習慣の確立は図れた。心の成長を促進するような学校行事の計画や、生徒が積極的に外部との交流に参加できるような計画を立案することは不足していた。	4	特別な生徒指導件数は減らすことはできなかったが、その他の生徒において、健全な生活習慣確立や高校生としての自覚の深まりが、50周年記念行事や各学校行事を通じて垣間見ることができた。	基本的な生活習慣の確立と挨拶のできる明るい学校にする。
進路指導	学校の方針に基づいた進路指導を展開し、個々の生徒の進路希望に即した緻密な指導を実行する。また、本校独自のキュリア教育を実施する。	学校の方針に基づく進路指導、生徒への情報提供、個々の生徒への対応、就職指導、進学指導、キャリアパートナーシップ事業	現在行われている指導を精査し、学科・コース(進路)別の進路指導を補完する教材を検証し、活用を図る。また、キャリアパートナーシップの拡充(参加生徒、協力企業)を図る。第3学年の就職希望者については、早期からの就職活動・就職試験の対策を講じる。	学科・コース・学年における進路指導が心掛けられた。進路学習、進路講演、コース選択説明会、キャリアパートナーシップ、大学説明会などを通じて、生徒個々が将来に向けた進路意識は高まっている。	4	生徒の進路に合わせ、キャリアパートナーシップ先を選び、積極的に参加させることができた。就職希望者に対しても、高校2年生の段階で就職試験用の問題集を用意させ、対策をとることができた。	大学進学に関し、悔いのない選択をおこなわせるため、広い視野を持ち大学選びができるよう生徒および保護者へ働きかける。
安全管理	日常から防災に対する意識を高め、予期せぬ災害時に適切な対応ができる体制作りをすることが必要。また、学校としても校内の危険個所の定期的な点検、スクールバスの安全運行といった意識を常に持ち合わせる必要がある。	防災訓練(校内・校外)、災害時の対応、安全な教育環境、安全なスクールバスの運行	防災という単独の発想ではなく、教科・行事に安全教育の項目を取り入れ、安全教育(災害安全・生活安全・交通安全)の効果を高める。教職員については、日常の交通安全、運転マナーの向上について呼び掛けを行う。	防災訓練の一環として、津波に対する避難訓練も実施した。防災マニュアルに則した各種の防災訓練を実施する必要がある。スクールバスの安全運行は図られた。	4	防災訓練では大学教授による講義をいただき知識の定着を図った。スクールバスも事故なく1年間が終了できた。AEDの点検を定期的に行い、新しいガイドラインに沿ったAEDを購入していただくことになった。	一つ一つの訓練やマニュアルが浸透するよう、折々にその重要性を説明し、意識を高める。防災教育では自己判断の育成を養いたい。
保健管理	生徒の健康管理のための検診計画を作成・実行し、疾病者に対する治療勧告を確実に行う。また部活動の活性化を図り、ボランティア活動に積極的に取り組む。	検診計画、健康管理指導、運動部・文化部の活性化、ボランティア活動への参加	治療・相談に来るのではなく、やむを得ないことではあるが、年間3,000人の来室に対して、保健体育課、学年部と連携して、対策を講じる。また、教職員の健康管理・改善の推進を図る	生徒の保健委員会を活性化させることは不足していた。利用人数が増加傾向にある心の相談で来室した生徒への対応を、生徒相談員やスクールカウンセラーと連絡を密に取り合い行うことができた。保健室の管理(薬品、個人情報)機能を高めるための対策は講じた(薬品庫の施錠、学校・家庭間連絡封筒作成)。	4	日常的な疾病や怪我も含め、様々な問題を抱える生徒も年々増加している傾向の中で、減らすことは難しいが、その都度誠意ある的確な対応が求められる今日、保健体育課として保健室と連携し、事故・問題発生に対して真剣に取り組んできた。	病理的理由による遅刻・欠席・保健室利用等が積み重ならないよう、日ごろから意識させるとともに、人間関係の問題で悩む生徒には早期の個別対応とカウンセリングの有効利用をする。
特別支援教育	法人のスケールメリットをいかし、本校独自の高・大・高・専一貫教育を推進し学園全体の活性化を図る。また、課題研究を推進し他校との差別化を図りつつ、進路実績につなげる。	高・大・高・専一貫教育、外部機関との連携教育、SSH事業への取り組み、課題研究	高・大・高・専一貫教育については、大学との連携を、今後一層深めていく。高・専一貫コースの専門学校別人数に差異が生じた(静岡産業技術専門学校は増、静岡デザイン専門学校は減)ので、各専門学校から最新の情報提供をしてもらい、進学者とコース選択者の増加を図る。	高・大・高・専一貫教育の内容の検証と検討が行われ、社会で求められる課題発見力、課題解決力、プレゼンテーション力、コミュニケーション力を身につけさせるために課題研究を推進させた。	4	高・大・高・専一貫コース2年生には、出張講義・夏季実験講座の事前・事後指導を行い、生徒の最先端の研究に対する関心を高めた。高専一貫教育は中身はうまくいっていると思う。生徒保護者の意識も高い。	入学試験なしで大学に進めるという安易な気持ちの生徒、レポートの丸写しといった「甘い気持ち」で大学の講義に向かう生徒への一層の指導の強化が求められる。

領域	ねらい	評価項目	達成目標	昨年度の実績		成果と課題	次年度の取組
組織運営	組織的な校務分掌体制を整え、規律をもって教職員が服務を全うする。また計画的な予算編成を中長期的な観点を考え、日常の経理業務を正しく管理する。加えて個人情報管理を適切に行なう。さらに保護者・地域と連携した活動を展開する。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の策定及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立等、効果的な活用がされているかチェック機能の確認をする。	強い学校組織、校務分掌体制の確立のために、外部のものとの参照と検証を図る。そこから効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立を検討する。	効果的な学校運営体制の確立、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の策定及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立等、活用はされていたが、チェック機能の確認が遅れた。	3	効果的な学校運営体制、組織的な校務分掌体制、規律正しい勤務体制、連携した危機管理体制、計画的な予算執行、中長期計画の策定及び遂行、経理業務の管理、個人情報保護、公文書の管理、情報収集体制の確立等、チェック項目の多い中大きなミスはなく行われたが、組織的な動きとしては一考が必要である。	現状の情報セキュリティ、危機管理体制の性能アップに向けての検証を行う。公文書の管理、情報収集体制の確立等、効果的な活用がされているかチェック機能の確認をする。
研修	学校の教育内容が問われる時代、教職員の資質向上が常に求められるので、計画的かつ時代が求める教師となっていくための研修を的確に実施し、各教職員が個々のスキルを上げていく体制作りをする。また、研修内容を共有化していくためのシステム作りをしていく。	計画的な研修体制の確立、郊外研修への参加、研修報告会の実施	学校の教育内容が問われ、教員の資質向上が求められる中で、時代が求める教員となることと、各教員が個々のスキルを上げていくために、教科指導力と生徒指導力向上のための研修を実施する。	教職員の資質向上に関する研修は継続して実施された。その研修を実施することで組織として何を变えるかといった目的意識をしっかりと持って教員研修が展開された。研修報告会、フィードバック研修も行い、スキルの維持を確認することは不足していた。	3	教科指導力と生徒指導力を向上させるという目的をしっかりと持って教員研修が展開された。研修報告会、フィードバック研修に関しても、職員会議や各教科部会等を通し確実におこなった。生徒の質や目標とする進路、更に保護者の価値観が多様化する中で教員としての高いスキルが求められる。	当然のことながら教職員の資質向上に関する研修は継続されるべきである。教科指導に関する研修はもろろんのこと、生徒指導、保護者への対応のスキルをあげるための研修も行う必要がある。また、研修が実践に活かされるような振り返る機会を設ける必要もある。
保護者、地域住民との連携	学校を支えてくれる保護者の会や外部団体との連携を強化し、学校運営を側面から支援してくれる組織の意見を受け入れながら、更なる本校の発展を目指す。	保護者の会との情報交換、学校運営に対する外部団体の参画、外部要望の学校運営に対する反映、保護者に対する協力依頼	これまでの教育活動や学校行事への支援・協力に加えて、創立50周年記念事業の一環である記念式典や人工芝の敷設を機に、保護者や地域住民からの理解や協力を得るとともに、今後の連携について検討し、新たな学校作りを図る。	学校行事(文化祭・体育祭)へ、年々保護者(の会)からの支援、協力(出席)が増えていると同時に、学校との連携も高まっている。地域住民との連携はあまり図られていない。	4	保護者の会との連携は平穏な状況に戻った。保護者の会主催の環境整備活動や広報誌も滞りなく終えることができた。	保護者の会との活動は、現状維持で安定的な運営を進めていく。外部団体や地域との連携は、本校の行事、生徒活動、施設等を活用した形で推進していく。
施設設備	施設設備の美化と定期的な点検を確実にし、安全管理に努め、生徒たちにしっかりと学習環境を整備する。	効果的な施設利用と環境美化、施設・設備の点検、学習環境の整備、図書館の活用	生徒・教職員ともに、学習環境となる施設・設備の維持・管理(美化)と、節電・節水・節約に対する意識を、学校内だけに留まらず社会的意識としても高揚させる。	日常的に使用する施設や用具、備品による事故・怪我が起こらないようにチェック体制、教職員の危機管理が行えた。節電・節約への取り組みが行われた。	4	普段の清掃活動や移動教室の際のエアコンの電源管理の注意に併せ、その積み重ねが組織運営において大きな効果を生むという意識を持たせるよう指導した。	設備を大切に利用すること、本校が予算をひとつひとつ大切に使う教育環境を整えていることなど、日常的に理解を求める。美化委員会の活動を強化したい。
				総合評価	4		